

新刊紹介

董国強編著、関智英・金野純・大澤肇編訳・解説

『文革：南京大学 14 人の証言』

1977年8月の中国共産党第11回全国代表大会で文化大革命の終結が宣言され、81年6月の6中全会で採択された歴史決議では、文革は「指導者がまちがってひき起こし、……党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱」と総括された。爾来、文革に関して中国の内外で多くの回想録、資料、研究が発表されている。ただ、中国では文革に関する自由な研究は限度があるようで、ここに紹介する『文革』もこの日本語訳本が初めての公刊となるものである。

本書は、南京大学文革専門研究活動として行われた文革経験者数十名からの聞き取り記録のうち14人の証言を収めるものである。いずれも文革当時、南京大学に在職、在学中であった人々であるが、文革への関わり方は様々であった。中共中央における文革の正式発動は1966年5月16日の「通知」にあるが、大衆運動として全国展開へのきっかけは北京大学で出された学長批判の壁新聞を紹介する6月2日の放送であった。南京大学ではその日のうちに匡亚明学長を批判する壁新聞が貼り出されている。8月には3つの紅衛兵組織ができています。出身のよい「紅五類」の人々による組織、出身の如何にかかわらない組織、そして劉少奇が派遣したとされる省工作隊支持の組織。本書の1番目、2番目、6番目、7番目の証言者はこの間の状況と組織間の対立をそれぞれの立場から述べている。このうち注目すべきは7番目の証言であろう。彼は壁新聞を抑圧する大学当局を告発するために北京へ行って曹軼欧（康生夫人）に会い、上海で張春橋に会って励まされる。8月に再度北京へ行き、紅衛兵組織について教えられ、「紅五類」の人々を集めたのであった。6番目の証言者は、8月末に毛沢東の指示で省工作隊が撤退すると組織を離脱して北京へ行き毛沢東接見に参加ののち、各地を廻って楽しかったと語り、「逍遙派」を自称する。また、当時中学生であった（74年工農

兵学生として入学) 13 番目の証言者は「反党」「反毛」と聞くだけで義憤を覚えて紅衛兵に参加したという。一方、当時生物学科副主任・同科中共総支部委員であった 3 番目の証言者は「資産階級実権派」として批判されて家財まで没収されている。また、中国文学科助教であった 10 番目の証言者は 58～62 年に文革は始まっていたとの印象を持っている。このように、以後の体験もその時々湧いた運動への疑問も含めて、それぞれの立場から語られている。中央の動向と造反派間の抗争、71 年の「五・一六」反革命集団」の名目の下に行われた造反派取締り、農村への下放とそこで見た農村の貧窮状態などなど。

編者董国強氏は、解説「文革とオーラルヒストリー」で、資料としてのオーラル・ヒストリーの重要性を論じ、本書に登場する語り手と聞き手それぞれが歴史に対して真剣に向き合う姿勢を持っているとしてこれらの証言が貴重な一次資料たり得ると述べている。一般に、大衆が参加した政治・社会運動の歴史を辿る場合、その運動の組織者あるいは権力者の側の資料が多い。しかし、大衆の参加実態をも知り得てこそ運動全体像が見えるのではないか。文革は、一方で共産党中央とその周辺におけるイデオロギー・権力闘争であったが、他方で多くの大衆が参加し、あるいは巻き込まれた運動であった。本書に収められた証言は後者の実態を語る資料の一つであろう。

ところで、本書の編訳者は読者のために様々な工夫をこらしていることを紹介しておきたい。本書の冒頭に解説、各章（各証言）の前にその要約を、さらに殆どの章の後に「コラム」として「南京大学」や「毛沢東語録」「糧票」など中国現代史の基礎知識を提供している。また、文革当時の写真と近年の南京大学などの写真が随所に挿入されている。董氏は、本書が専門家には資料集としての価値をもつと同時に、一般の読者には非常に面白い読み物だと述べている。まさに編訳者は本書が啓蒙書としても読まれることを念頭に努力したと言えるのかも知れない。その点からすると、文革全体の流れが分かるように簡単な年表が付されているとよかったのではないだろうか。（本庄比佐子）

董国強編著、関智英・金野純・大澤肇編訳・解説

『文革：南京大学 14 人の証言』（築地書館、2009 年 12 月）